

学位論文要旨

日本語母語話者と学習者による定式表現の処理
— 意味的透明性に着目して —

広島大学大学院教育学研究科

文化教育開発専攻 日本語教育学分野

学生番号 D150008 氏名 蘇振軍

I. 論文題目

日本語母語話者と学習者による定式表現の処理
－意味的透明性に着目して－

II. 論文構成（目次）

第1章 序論

- 1.1 本研究の目的
- 1.2 本論文の構成

第2章 先行研究

- 2.1 定式表現の定義，判定および分類
 - 2.1.1 定式表現に関する定義
 - 2.1.2 定式表現の判定方法
 - 2.1.2.1 頻度と分布
 - 2.1.2.2 Wray による判定モデル
 - 2.1.3 定式表現の分類
 - 2.1.4 まとめと本研究における定式表現の定義
- 2.2 定式表現の研究アプローチ
 - 2.2.1 記述的アプローチ
 - 2.2.2 コーパス言語学を用いたアプローチ
 - 2.2.2.1 コーパス基盤型アプローチ
 - 2.2.2.1.1 日本語辞書編集と学習者向けの教科書開発
 - 2.2.2.1.2 日本語学におけるコロケーション研究
 - 2.2.2.1.3 日本語学習者を対象とした研究
 - 2.2.2.2 コーパス駆動型アプローチ
 - 2.2.2.3 コーパス言語学を用いたアプローチ研究のまとめ

2.2.3 言語心理学的アプローチ

2.2.3.1 慣用句の認知・処理に関する研究

2.2.3.2 コロケーションと語彙束の処理に関する研究

2.2.3.3 言語心理学的アプローチ研究のまとめ

2.3 先行研究のまとめと研究課題

2.3.1 日本語における定式表現の種類

2.3.2 先行研究に残された課題

2.3.3 本研究の課題

第3章 句単位の読み上げ実験（実験1）

3.1 実験1の目的

3.2 実験1の仮説

3.3 実験方法

3.3.1 実験参加者

3.3.2 実験計画

3.3.3 材料

3.3.4 装置

3.3.5 手続き

3.4 実験1の結果

3.5 実験1の考察

第4章 文単位の読み上げ実験（実験2）

4.1 実験2の目的

4.2 実験2の仮説

4.3 方法

4.3.1 実験参加者

4.3.2 実験計画

4.3.3 材料

4.3.4 装置

4.3.5 手続き

4.4 実験 2 の結果

4.5 実験 2 の考察

第 5 章 口頭再生実験 (実験 3)

5.1 実験の目的

5.2 再生成績の比較

5.2.1 実験参加者

5.2.2 実験計画

5.2.3 再生成績に関する仮説

5.2.4 材料

5.2.5 装置

5.2.6 手続き

5.2.7 再生成績の結果

5.2.8 再生成績の考察

5.3 課題遂行時間の比較

5.3.1 材料

5.3.2 実験参加者

5.3.3 実験計画

5.3.4 課題遂行時間に関する仮説

5.3.5 課題遂行時間の結果

5.3.6 課題遂行時間の考察

第6章 総合考察

6.1 結果のまとめ

6.1.1 定式表現が句処理に与える影響

6.1.2 定式表現が文処理に与える影響

6.1.3 定式表現が言語産出に与える影響

6.2 総合考察

6.2.1 定式表現と自由結合の比較

6.2.2 意味的透明性が定式表現の処理に与える影響

6.2.3 母語話者と学習者の比較

6.3 教育的示唆

6.4 今後の課題

参考文献

資料

Ⅲ. 論文要旨

第1章 序論

1.1 本研究の目的

定式表現とは、kick the bucket (死ぬ) のように複数の単語が組み合わさり、1つのまとまった意味や機能を表す表現を指す (Wray, 2009)。近年、英語を対象とした第一言語研究では、この定式表現の役割について様々な検討がなされている。言語心理学分野では、定式表現は長期記憶に固まりで貯蔵され、統語構造の分析がなされないため、定式表現を含まない文や節よりも処理速度が速いとされる。これは、話し手と聞き手の処理負荷を軽減することができると言われてしている (Schmitt & Conklin, 2012; Wray, 2009)。しかし、英語を学ぶ学習者は定式表現に関する知識が乏しく、常に語彙や文法といった知識を用いて文を産出するため、上級者であっても、不自然な表現を産出することが少なくない (Wray, 2009)。

こうした研究は、主に英語を対象としてなされている。一方で、日本語を対象とした定式表現研究では、慣用句やコロケーションのような2語以上の語の結びつきについて、用例を基に研究者の内省によって分析を行う研究や、特定の文法項目の用例をコーパスから大量に抽出し、統計的な手法で分析する研究が多くなされている (e.g., Ono & Thompson, 2009)。しかし、日本語母語話者と学習者による定式表現の処理方法について検討した研究は極めて少ない。

そこで、本研究では、定式表現が母語話者と学習者における日本語の処理と産出を促進するかについて検討する。具体的には、定式表現の種類によって処理の速さが異なるか、産出の状況が異なるかおよび、母語話者と学習者の間に相違があるかという3点に着目する。

1.2 本論文の構成

全6章で構成されている。第1章では、研究の背景と目的を述べ、第2章では先行研究を概観した上で、研究課題を設定する。第3章では、句単位の読み上げ課題を用いて母語話者と学習者が定式表現を速く処理するかを検討する。第4章では、文単位の読み上げ課題を用いて、定式表現が文の処理を促進するかについて検証する。第5章では、定式表現が言語産出を促進するかについて口頭再生課題を用いて検討する。第6章では、各章の研究結果をまとめ、総合考察を行い、教育的示唆、今後の課題を述べる。

第2章 先行研究

2.1 定式表現の定義、判定および分類

定式表現に関する定義や分類は研究の観点によって異なるが、その種類は主に(1)句の意味が構成語から推測できず、固まりとして慣用的に意味を表す慣用句、(2)構成語から句全体の意味推測ができ、2つの実質語が慣用的に共起する語彙的コロケーション(例:傘を

さす)と意味的コロケーション(例:[鳥]がさえずる), (3) コーパスで高頻度に出現し, 実質語と機能語で構成される語彙束の3つにまとめられる。これらの定式表現については, 研究者の判断や, コーパスでの頻度による分析などのような1つの指標を基に定義, 分類されている。しかし, Wray (2002) は1つの指標だけでは不十分であり, 定式表現が心内辞書にどのように貯蔵され, 処理されるかを検討する必要があるとし, これは定式表現の本質的特徴の解明につながると指摘している。そこで, 本研究では, Wray (2002) の定義に従い, 固まりで心内辞書に貯蔵され, 処理される表現を定式表現とする。

2.2 定式表現の研究アプローチ

定式表現の研究アプローチには, (1) 定式表現の文法的・形式的特徴を研究者の判断を基に記述するアプローチ, (2) コーパスから頻度を基準に抽出したコロケーションや語彙束を扱うコーパス言語学的アプローチ, (3) (1) や (2) で得られた表現を材料とし, 定式表現が固まりで処理されるかという固まり仮説を検証する言語心理学的アプローチの3つがある。

近年, 英語を対象とした研究では, コーパス言語学的アプローチと心理学的アプローチとを統合した研究が多く行われている (e.g., Ellis, Simpson-Vlach, & Maynard, 2008)。研究結果から, 母語話者, 学習者ともに, 定式表現はその種類に関わらず文法と語彙によって自由に構築された表現(以下, 自由結合)より速く処理, 産出され, 固まり仮説が支持されることが証明されている (e.g., Schmitt, 2004)。特に定式表現の頻度や構成語の固定度, 構成語からどの程度句の意味を推測できるかという意味的透明性が処理に影響を与えており, 高頻度で固定度の強い定式表現のほうが固まりで心内辞書に貯蔵されている可能性が高い (e.g., Ellis & Simpson-Vlach, 2009)。しかし, 意味的透明性に関しては, 意味的透明性の高い定式表現のほうが産出されやすいという結果 (Schmitt, Grandage, & Adolphs, 2004) と, 意味的透明性の高低に関わらず自由結合より速く処理されるという結果 (Gibbs, Nayak, & Cutting, 1989) が混在している。

また, 意味的透明性の低い定式表現の処理に関しては, 慣用的な意味が直接心内辞書にアクセスされるため文字通りの意味より速く処理されるという語彙表象仮説 (Swinney & Cutler, 1979), 意味的透明性の低い定式表現は構成語の意味が句の慣用的な意味の理解を干渉するため処理速度が遅いという慣用句分解仮説 (Gibbs et al., 1989), 句の最初の構成語が認知された時は文字通りの意味が活性化されるが, 慣用的な意味が活性化される構成語(いわゆるイディオムキー)に辿りつくまで慣用的な意味が処理されるという構造仮説 (Cacciari & Tabossi, 1988) の3つの仮説が提唱されているが, 先行研究で一貫した結果は得られていない。また, 日本語学習者の場合, 定式表現の頻度が処理に影響を与えることが明らかになっているが (李, 2012; Schmitt et al., 2004), 頻度の影響を考慮した上で意味的透明性の影響を検討した研究は管見の限り見当たらない。

さらに, 日本語を対象とした研究は主に記述的研究やコーパス言語学的アプローチが中心で, 英語の定式表現研究にみられるような多角的検討はほとんど行われておらず, 定式表現が日本語母語話者と学習者の心内辞書にどのように貯蔵, 処理されているかに関する研

究はまだ進められていない。

2.3 先行研究のまとめと研究課題

まず、意味的透明性の高低が定式表現の処理に与える影響については研究で一貫した結果が得られていない点である。

次に、固まり仮説や語彙表象仮説などのような仮説を検証する実験方法が偏っている点である。先行研究ではフレーズ性判断課題と、単語単位、句単位の読み上げ課題が多く用いられているが (e.g., 李・贾, 2013), 文単位の処理を検討したものは Tremblay, Derwing, & Libben (2007) のみであり、口頭再生課題を用いた研究は Schmitt et al. (2004) のみである。単語や句を単位とする理解課題は、定式表現の処理過程の解明には有効であるが、定式表現を含む文レベルでの処理促進効果までは検討できない。また、定式表現が固まりで心内辞書に貯蔵されているのであれば、産出時も心内辞書に速くアクセスし、かつ正確に産出できるはずであるため、再生成績と再生に要した時間 (以下、課題遂行時間) についても検討すべきである。唯一この課題を用いた Schmitt et al. (2004) は再生成績しか分析しておらず、産出プロセスに関する明確な結果を検討していない。

最後に、日本語母語話者と学習者がどのような表現を固まりで処理し、どのような表現を統語的に処理するか、両者の処理過程に類似点、相違点があるかは明らかにされていない。

これらの残された課題を踏まえ、本研究では、定式表現の意味的透明性を操作して日本語母語話者と学習者が定式表現をどのように処理するか実験的に検討する。その際、「腰が低い」のような慣用句を意味的透明性の低い定式表現として扱う。「注目を集める」のように慣用句と同様の統語構造を持つ語彙的コロケーションを意味的透明性の高い定式表現として扱う。そして、自由結合は先行研究に倣い、定式表現の実質語を他の語に入れ替えた自然な日本語とする。研究課題は以下の通りである。

【研究課題 1】母語話者と学習者は定式表現を自由結合より容易に処理するか、意味的透明性は句の処理に影響を与えるか、母語話者と学習者の間に相違があるか。

【研究課題 2】母語話者と学習者において、定式表現が文の処理を促進するか、意味的透明性が文の処理に影響を与えるか、母語話者と学習者の間に相違があるか。

【研究課題 3】母語話者と学習者が定式表現をどのように産出するか、自由結合より容易にかつ、速く再生するか、意味的透明性はその再生に影響を与えるか、母語話者と学習者の間に相違があるか。

第 3 章 句単位の読み上げ課題 (実験 1)

3.1 実験 1 の目的

定式表現および、その意味的透明性が句の処理に与える影響を検討する。

3.2 実験方法

母語話者 20 名，上級学習者 20 名を対象に，句単位の読み上げ課題を用いて実験した。

実験材料は以下の手順で作成した。語彙的コロケーション（例：気持ちが悪い），または慣用句（例：虫がいい）が含まれる課題文を 18 文，そして定式表現の統制句が含まれる統制文を 18 文作成した。語彙的コロケーションは，まず『現代日本語書き言葉均衡コーパス』において出現頻度が上位 20 位以内の動詞と形容詞を選定し，それらのコロケーションを『研究社日本語コロケーション辞典』（柏崎・藤村・鈴木, 2012）から 9 個選定した。慣用句は基幹慣用句リスト（呉, 2016）を参考に，使用範囲が広く使用頻度も高い表現を 9 個選定した。統制句は定式表現の目的語，または主語を入れ替えて作成した。両方の単語はモースラ数も，コーパスでの使用頻度も全て統制した。

調査の処遇は以下の通りである。まず，コンピューターに注視点が呈示され，キーを押すと，文の先頭部分が呈示された。それを読み終わり，キーを押すと，文の次の部分が呈示された。このように，文を全て読み終わった後，文に関する質問文が呈示された。参加者が呈示された定式表現を，声を出して読み終わり，キーを押すまでの時間を読み上げ時間として自動計測された。本試行終了後，未知語の有無の確認や，日本語学習歴，日本滞在歴に関する筆記アンケートを行った。

3.3 実験 1 の結果

課題句と統制句の読み上げ時間を比較したところ，以下の結果が得られた。(1) 母語話者，学習者ともに，定式表現を自由結合より速く処理した。(2) 母語話者，学習者ともに，意味的透明性の高い定式表現のほうを，意味的透明性の低い定式表現より速く処理しており，意味的透明性が定式表現の処理に影響を与えた。(3) 全ての課題句と統制句において，母語話者は学習者よりも速く処理した。

3.4 実験 1 の考察

これらの結果は，英語を対象に句単位の読み上げ課題を用いた Tremblay et al. (2007) や李・賈 (2013)，日本語のコロケーションを対象とした李 (2014) と趙・安永・小鳥・林 (2016) の結果と一致している。これより，定式表現は日本語母語話者だけでなく，学習者の言語の処理負荷も軽減させたことが明らかになった。また，意味的透明性の高低による影響については，母語話者，学習者ともに Gibbs et al. (1989) が提唱した慣用句分解仮説を支持する結果となった。つまり，意味的透明性の高い定式表現には，構成語の意味が句の意味処理に貢献したのに対し，意味的透明性の低い定式表現にはそのような効果がなく，構成語の意味が句の意味推測を妨害した結果，前者のほうが速く処理されたと考えられる。

第4章 文単位の読み上げ課題（実験2）

4.1 実験2の目的

定式表現および、その意味的透明性が文の処理に与える影響を検討する。

4.2 方法

母語話者20名、上級学習者20名を対象に、文単位の読み上げ課題を用いて実験した。実験1と同様の実験材料を用いた。まず、コンピューター画面に注視点が呈示され、キーを押すと、次の画面に文が呈示される。それを読み終わり、キーを押すと、次の画面に質問文が呈示された。参加者が呈示された文を、声を出して読み終わり、キーを押すまでの時間を読み上げ時間として自動計測された。本試行終了後、実験1と同様のアンケート調査を行った。

4.3 実験2の結果

課題文と統制文の読み上げ時間を比較したところ、以下の結果が得られた。(1) 母語話者、学習者ともに、定式表現を含む文のほうを、自由結合を含む文より速く処理した。(2) 母語話者では、定式表現の意味的透明性が文の処理に影響を与えなかったのに対し、学習者では、意味的透明性の高い定式表現のほうの意味的透明性の低い定式表現より速く処理されていた。(3) 全ての課題文と統制文において、母語話者は学習者より速く処理した。

4.4 実験2の考察

まず、定式表現文と自由結合文の比較について、両参加者ともに、定式表現文を自由結合文より速く処理した。これらの結果は英語を対象とした Tremblay et al. (2007) や Ellis et al. (2008) の研究結果と一致しており、定式表現が句の処理だけでなく、文の処理も促進していることが明らかとなった。

次に、意味的透明性の影響については、母語話者は意味的透明性の高低に関わらず、どちらの定式表現も固まりで処理した。そのため、母語話者が必要でない限り、文を細かく分析せずに処理するイディオム原理に従って文を処理することが示唆される。一方、学習者は語彙的コロケーションと慣用句の意味を理解していたにもかかわらず、慣用句を含む文は語彙的コロケーションを含む文よりも処理速度が遅かったことから、意味的透明性が文の処理に影響した可能性がある。しかし、実験1と実験2の未知語調査の結果において、慣用句に関する未知語が語彙的コロケーションより多かったことから、学習者にとって本実験に使用した慣用句の習得が語彙的コロケーションほど進んでいなかった可能性もあり、意味的透明性の影響はあくまでも推測の域を出ない。

第5章 口頭再生課題（実験3）

5.1 実験目的

定式表現および、その意味的透明性が産出に与える影響を検討する。

5.2 再生成績の比較

母語話者 20 名と上級学習者 30 名を対象に口頭再生課題を用いて実験した。実験 1, 2 と同様の材料を用いて各文を聴覚呈示した後、足し算のような干渉課題を挟んでから、聞いた文を再生させた。

対象項目の再生において、完全に再生できた項目を 2 点、対象項目の意味を保持したままの述語の入れ替えを 1 点、再生できなかった項目、未知語として確認された項目を 0 点にして再生成績を算出した。

その結果、(1) 母語話者は課題文も統制文もほぼ満点であったのに対し、学習者は完全に再生できた文が非常に少なく、ほとんど自分なりに再構築した文である。また、母語話者、学習者ともに、定式表現と自由結合の再生成績に有意な差はみられなかった。(2) 意味的透明性は母語話者、学習者の再生成績に影響を与えなかった。(3) 全ての課題句と統制句において、母語話者は学習者より再生成績が高かった。

これらの結果から以下が推察できる。まず、本実験で用いた文の長さは最も長いものでも 40 モーラであり、母語話者にとっては短く再生が容易であったことが考えられる。また、学習者の場合は、再生できない定式表現が多く、成績が下がったことが原因で、再生成績は定式表現と自由結合の間に有意差がなかったと考えられる。

さらに、自由結合は構成語の入れ替えが最も自由であるがゆえに、1 点を取れる学習者が多かった（例：検索をかける→検索をする）。また、定式表現には多くの学習者が 0 点を取った項目が含まれていた（例：理解を得る→理解が出られる）。このことから、学習者は定式表現に関する知識が乏しいこと、共起関係に関する不十分な知識を用いて語と語を組み合わせることで日本語を産出していることが推測される。よって、学習者は L2 を産出する際に自由選択原理にしたがっていると見えよう。さらに、再生成績が高い項目（1.7 点以上）に含まれていた 6 つの定式表現については、その前後部分の再生が不正確であったにもかかわらず、定式表現だけは正確に再生されていた。よって、これらは学習者の心内辞書に語彙化されて固まりで貯蔵されている可能性があると思われる。

5.3 課題遂行時間の比較

課題句と統制句の再生成績が高い項目をそれぞれ 10 項目選定した。これらの項目と統制句を完全に再生できた学習者は 18 名であり、これに合わせて母語話者も 18 名のデータを、録音した音声データから切り出した。課題遂行時間を統計的に比較したところ、以下のような結果が得られた。(1) 母語話者、学習者ともに、定式表現を自由結合より速く再生した。(2) 母語話者の場合は、意味的透明性が再生速度に影響を与えたが、学習者の場合は、意味

的透明性が再生速度に影響を与えず、語彙的コロケーションと慣用句の課題遂行時間に差がなかった。(3) 母語話者は学習者より全ての句の課題遂行時間が短かった。

これらの結果から、意味的透明性が母語話者の定式表現の再生に影響を与え、慣用句分解仮説を支持することがわかった。つまり、意味的透明性の高い定式表現の場合は心内辞書から取り出しやすいが、意味的透明性の低い定式表現の場合、文字通りの意味が言語の再構築を阻害したことが示唆される。このことから、母語話者の心内辞書には、定式表現の構成語の意味概念だけでなく、句全体の意味概念も貯蔵されていることが窺える。一方、学習者の場合は流暢に運用できる程度に習得している定式表現に関しては、それらが固まり仮説に従っており、固まりでの心内表象を有することが示唆された。また、学習者であっても、母語話者のように文を細かく分析せずに言語を処理できることが示唆される。

第6章 総合考察

6.1 結果のまとめ

まず、定式表現が句処理に与える影響について、以下のような結果が得られた。母語話者、学習者ともに、定式表現を自由結合より速く処理しており、両者ともに意味的透明性の高い定式表現のほうが、意味的透明性の低い定式表現より速く処理し、慣用句分解仮説を支持する結果となった。

次に、定式表現が文処理に与える影響について、母語話者、学習者ともに、定式表現文の処理が自由結合文よりも速かった。母語話者は意味的透明性の高低に関わらず処理速度が同様であったが、学習者は意味的透明性の高い定式表現のほうをより速く処理した。

最後に、定式表現が言語産出に与える影響である。母語話者、学習者ともに、定式表現を自由結合より速く再生したが、母語話者は意味的透明性の高い定式表現をより速く処理した。学習者は意味的透明性の高低の間に再生速度の差がなかった。

6.2 総合考察

まず、定式表現と自由結合の比較についてである。母語話者、学習者ともに句処理、文処理、産出の全ての課題において定式表現が自由結合よりも速く処理された。これらの結果は、理解課題を用いた Jiang & Nekrasova (2007) と Tremblay et al. (2007)、李 (2012) の結果と一致し、日本語においても定式表現が処理と産出を促進することがわかった。

次に、意味的透明性の影響について考察する。母語話者の場合、句単位の読み上げ課題では、定式表現のみが呈示されることから、意味的透明性の低い定式表現においては文字通りの意味も活性化され、処理負荷がかかった。文全体として処理される際には、母語話者の場合、イディオム原理に従って定式表現が固まりとして処理され、その慣用的な意味が心内辞書からそのままアクセスされた結果、意味的透明性の高低に関わらず両方ともに自由結合文より速く処理されたと考えられる。しかし、聞いた文を再構築する場合は、語彙と統語知識によって文を組み立てることが要求されるため、慣用句の持つ慣用的な意味と同時に、文

字通りの意味も活性化され、文字通りの意味だけの語彙的コロケーションよりも処理時間がかかったと考えられる。以上のことから、母語話者が意味的透明性の低い定式表現を句単位として処理する場合には分解仮説に従うが、文に取り込まれた場合では構造仮説によって処理することが言える。よって、定式表現の提示の仕方によってその処理プロセスが異なることが示唆される。

一方、学習者の場合、実験 3 の再生成績および課題遂行時間には意味的透明性の影響がなかったが、実験 1 と 2 では、意味的透明性の高い定式表現が意味的透明性の低い定式表現よりも速く処理された。これは、本研究で用いた意味的透明性の低い定式表現が透明性の高い定式表現に比べて定着していなかった可能性が考えられる。また、再生成績の分析でも、意味的透明性の高い定式表現の構成語の入れ替えが意味的透明性の低い定式表現より多く、未知語の割合も少なかったことから、その可能性が支持されていると考えられる。よって、学習者は主に自由選択原理に従って文を産出するが、課題遂行時間の分析から推察すると、習得が進んでいる定式表現は固まりで貯蔵されている可能性も示唆された。

最後に、母語話者と学習者の比較である。学習者の処理速度は英語の先行研究と同様、理解課題でも産出課題でも母語話者に著しく劣っていた。また、実験 3 の再生成績から、学習者は定式表現、特に意味的透明性の低い定式表現に関する知識が乏しい。このことから、学習者の心内辞書に貯蔵されている定式表現は母語話者のように豊富ではなく、Wray (2002) の L2 心内辞書モデルを支持していると考えられる。つまり、日本語学習者の心内辞書には定式表現が少なく、個々の語彙や形態素などの小さい単位の表現が貯蔵されている可能性が高い。

6.3 教育的示唆

本研究から、学習者は上級になっても目標言語の定式表現に関する知識が乏しいことが窺える。しかし、心内辞書に貯蔵されている定式表現が少ないにもかかわらず、定式表現は学習者の言語処理を促すことがわかった。この結果から、定式表現の獲得は学習者の処理速度を速め、適切な言語運用に役立つと期待できる。そして、L2 教育において定式表現に関する知識をいかに獲得させるかが重要な課題となることが示唆される。しかし、金・鄧 (2014) は中国の教科書では慣用句が重要視されていないことを、李 (2014) は「中国の教科書は新出単語を母語話者がよく使うコロケーションの形で提示していない」ことを指摘している。よって、L2 教育では初期段階から定式表現を積極的に導入することが重要だと考える。どの表現を導入するかに関しては、学習者の心内辞書について研究を積み重ねる必要があるが、慣用句は固まりとして初期から導入し、積極的に使わせる必要があると考える。また、母語話者コーパスで高頻度かつ複数のジャンルで広く使用される定式表現を優先的に導入することで、自然なインプットに出現する可能性の高い定式表現を指導でき、学習者の言語処理を促すことにつながると考えられる。

6.4 今後の課題

(1) 定式表現の選定方法の限界

本研究では母語話者を基準として定式表現の頻度を統制したが、学習者にとっての頻度は母語話者の頻度とは異なる可能性がある。そのため、今後は学習者コーパスの頻度も考慮して項目の選定をする必要がある。

(2) 実験課題の問題点

本研究で用いた読み上げ課題は定式表現の理解を扱う実験法とはいえ、産出を伴う。今後、理解のみを求めるフレーズ性判断課題を用いるなどして再検証する必要がある。また、本研究の口頭再生課題では、母語話者の再生成績に天井効果が出た。今後この点を配慮し、母語話者の作動記憶に処理負荷をかける材料を用いた実験をする必要がある。

(3) 学習者の習熟度と学習環境

本研究では上級学習者のみを対象としたが、習熟度によって定式表現の処理プロセスや心内辞書がどのように変容するかをさらに検討する必要がある。同時に、学習環境の影響も検討する必要がある。

(4) 定式表現の特徴と種類の限界

本研究では定式表現の意味的透明性に焦点を当てたが、今後、他の種類の定式表現および、頻度の影響についても検討が必要である。これにより、日本語学習者の L2 心内辞書及び定式表現処理過程の全体像を把握することができると思われる。

参考文献

- 柏崎雅世・藤村知子・鈴木智美 (2012). 『研究社日本語コロケーション辞典』 姫野昌子 (監修), 研究社.
- 金華・鄧娟娟 (2014). 「中国の大学の日本語教育における慣用句の扱い」『日本語教育研究』 60, 97-113.
- 呉琳 (2016). 「BCCWJ を用いた基幹慣用句の選定」『北海道大学大学院文学研究科研究論集』 16, 99-113.
- 趙立翠・安永大地・小鳥治幸・林洪 (2016). 「中国人日本語学習者のコロケーション処理の特徴に関する探索的な実験研究—日本語母語話者と対照しながら—」『第 27 回第二言語習得研究会全国大会予稿集』 41-46.
- 李更春・贾冠桀 (2013). 「英语程式语心理表征模式研究」『西藏大学学报—社会科学版—』 28 (2), 174-180.
- 李文平 (2012). 「コロケーション処理の影響要因に関する研究」『電子情報通信学会技術研究報告—信学技報』 112 (339), 65-70.
- 李文平 (2014). 「日本語教科書におけるコロケーションの取り扱いに関する一考察—中国の

- 日本語教科書と現代日本語書き言葉均衡コーパスとの比較—』『日本語教育学』157, 63-77.
- Cacciari, C., & Tabossi, P. (1988). The comprehension of idioms. *Journal of Memory and Language*, 27, 668-683.
- Ellis, N. C., Simpson-Vlach, R. C., & Maynard, C. (2008). Formulaic language in native and second language speakers: Psycholinguistics, corpus linguistics, and TESOL. *TESOL Quarterly*, 42(3), 375-396.
- Ellis, N. C., & Simpson-Vlach, R. C. (2009). Formulaic language in native speakers: Triangulating psycholinguistics, corpus linguistics, and education. *Corpus Linguistics and Linguistic Theory*, 5(1), 61-78.
- Gibbs, R. W., Nayak, N. P., & Cutting, C. (1989). How to kick the bucket and not decompose: Analyzability and idiom processing. *Journal of Memory and Language*, 28, 576-593.
- Jiang, N., & Nekrasova, T. M. (2007). The processing of formulaic sequences by second language speakers. *The Modern Language Journal*, 91, 433-445.
- Ono, T., & Thompson, S. (2009). Fixedness in Japanese adjectives in conversation: Toward a new understanding of a lexical ('part-of-speech') category. In R. Corrigan, E. Moravcsik, H. Ouali, & K. Wheatley (Eds.), *Formulaic language* (pp. 117-145). Amsterdam: John Benjamins.
- Schmitt, N. (2004). *Formulaic sequences: Acquisition, processing, and use*. Amsterdam: John Benjamins.
- Schmitt, N., Grandage, S., & Adolphs, S. (2004). Are corpus-derived recurrent clusters psycholinguistically valid? In N. Schmitt (Ed.), *Formulaic sequences: Acquisition, processing and use* (pp.127-150). Amsterdam: John Benjamins.
- Swinney, D. A., & Cutler, A. (1979). The access and processing of idiomatic expressions. *Journal of Verbal Learning and Verbal Behavior*, 18, 523-534.
- Tremblay, A., Derwing, B., & Libben, G. (2007). Are lexical bundles stored and processed as single units? In *23rd Northwest Linguistics Conference Working Papers of the Linguistics Circle of the University of Victoria* (19), 258-279.
- Wray, A. (2002). *Formulaic language and lexicon*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Wray, A. (2009). Future directions in formulaic language research. *Journal of Foreign Languages*, 32, 2-17.